

新 興 丸

《主要目》貨物船、大阪商船所屬、2,577総トン、
4,117重量トン、主機低圧タービンつき複二連成
汽機1基、出力1,870馬力、最高速力13.6ノット、
1938年浦賀船渠建造（いずれも竣工時のデータ）

終戦7日後、サハリンからの緊急避難民を 輸送中、ソ連潜水艦の攻撃を受ける



写真：関西汽船時代の「新興丸」（東京港で筆者撮影）

明らかにされた引揚船三隻への襲撃者

第二次大戦が終わってしばらく、米軍が大量に投下した浮遊機雷に触れて沈没する日本船が多かった。その数は五十隻近くにも達する。平和時に悩まされる残留地雷の脅威にも似ており、まことに痛ましかった。

だが、それ以上に痛ましいのは、八月十五日のポツダム宣言の受諾以後、雷撃や空爆などで六隻の船が沈められていることだ。

なかでも、終戦七日後の一九四五（昭和二十）年八月二十二日、サハリンからの緊急避難民を乗せた引揚船三隻が、留萌の沖で国籍不明の潜水艦の攻撃を受けて遭難した事件は、犠牲者のほとんどが老幼年者と女性であり、悲惨のきわみとしかいいようがない。

三隻の名は、通信省の海底電線敷設船「小笠原丸」、東亜海運の2E型戦時標準貨物船「泰東丸」、同じく東亜海運の貨物船「第二新興丸」（船名は当時）である。

悲劇の真相については、一昨年、その襲撃者がソ連太平洋艦隊の潜水艦であったことが明らかにされている。

「小笠原丸」と「泰東丸」は轟沈

八月十五日の終戦の玉音放送をはさみ、八月八日のソ連参戦から十九日の戦闘停止まで

の間、サハリン南部の旧領土（南樺太）は、過酷な戦場と化した。ソ連軍の進攻がはじまると、十八万の居住邦人は、着のみのままに先を争って南下。コルサコフ（大泊）など南部の要港にぞくぞくと集結した。

樺太庁と軍は、邦人の相当数を北海道に緊急避難させることとし、稚泊連絡船や海軍艦船などを投入して、コルサコフとネヴェルスク（本斗）から稚内と小樽へ向け、輸送をはじめた。大西雄三氏の『悲劇の泰東丸』（一九八四年みやま書房刊）によると、乗船者の条件は、六十五歳以上の老人、十四歳以下の児童・幼児、四十歳以下の女性、身障者および病人、と指示されていたという。

緊急輸送は八月二十三日まで続けられ、七万六千人が本土に避難できた。だがこの間、前述のように二十二日、コルサコフを出港した三隻が小樽に向かう途中、留萌の沖でソ連潜水艦の攻撃を受け、千七百人をこえる人命がうしなわれたのである。弱者を戦場から避難させるための措置がかえってアタとなった点では、沖繩からの疎開児童を乗せて沈んだ「対馬丸」のケースと似ている。

「小笠原丸」は雷撃で、「泰東丸」は砲撃とともに沈没。「第二新興丸」は雷撃で大破し、かろうじて留萌港に逃れた。

「泰東丸」の乗船者は大部分、船とともに海

底に消えたが、「小笠原丸」のばあいは、その多くが漁船に収容された。遺体がならんだ増毛の浜で供養した僧侶は、遺体のほとんどが、指示どおり女性と幼児などであったため、涙が出て読経がでなかつたという。

問題の潜水艦は、「小笠原丸」を雷撃したのが「L・12号」、「泰東丸」と「第二新興丸」を襲ったのが「L・19号」だったという。そして、非道な攻撃を加えたことについてだが、ソ連軍はどうやら、米戦艦「ミズーリ」での降伏文書調印の九月二日を終戦と考えていたらしい。三隻が遭難したこの日には、同じ海域で、大阪商船の貨物船「能登呂丸」も、ソ連機の空爆を受けて沈没している（雷撃によるとする史料もある）。

北朝鮮航路の定期船として誕生

「第二新興丸」は、貨物船「新興丸」として一九三八（昭和十三年）年に浦賀船渠で誕生した。北朝鮮く内地航路用に建造された七隻の同型船（貨客船五隻、貨物船二隻）の一隻で、厳寒の北朝鮮海域に耐えられるよう、頑丈な船体をもっていた。雷撃を受けても沈まなかつたのは、このためでもあろう。

主機もユニークだった。低圧タービン付き複二連成汽機。レシプロと低圧タービンを組み合わせた汽機であり、燃料効率を高めるた

め、浦賀船渠が開発したものである。竣工の翌年、国策会社東亜海運が設立。同船はこの会社に移籍した。次いで、太平洋戦争開戦三カ月前に海軍に徴用され、特設砲艦兼特設敷設艦となった。このとき、「第二新興丸」と改名されている。

留萌港に逃れた「第二新興丸」は、その後どうなったであろうか。

同船は結局着底したが、間もなく浮揚修理され、もとの「新興丸」に戻っている。そして、一九四八（昭和二十三年）年には関西汽船の手に渡り、政府のチャーターで三年間、サハリンからの復員輸送に従事した。よくよくこの船は、サハリンに縁がある。

一九五一（昭和二十六年）年に商業航海にカムバックすると、「新興丸」は、関西汽船の外航定期航路の開業第一船として、バンコク航路に就いた。この年には、沖繩定期航路の第一船にもなっており、同社の航路網拡大の大きがけとして大いに働いたのである。

一九六一（昭和三十六）年には佐野安商事に売却され、「第二金丸」と改名。ディーゼル主機への換装をふくむ大改装を受けた。そしてその五年後、同船はパナマ船主に身売りしている。

（山田 廸生）